

仙台市文化財調査報告書第111集

# 仙台平野の遺跡群Ⅶ

—昭和62年度発掘調査報告書—

1988年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第111集

# 仙台平野の遺跡群Ⅶ

——昭和62年度発掘調査報告書——

1988年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」調査に着手して7年が経過しました。これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や、郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査などを行ってまいりましたが、特に今年度は、陸奥国分寺跡、郡山遺跡、北目城跡にかかる調査を実施しました。

近年、文化や歴史的事項に関する市民意識は、少しずつ高まりを見せてきておるとは言え、第一次、第二次オイルショック以来景気が低迷し、文化財一般に対する無関心も一方では芽ばえている事実も見のがせません。しかし高度成長期が終って、新しいわが国の進路を見極めなければならないこの時期こそ、しっかりと生活の中に文化に対する位置を確保しなければならないと考えます。

開発に伴う発掘調査が多い中、この「仙台平野の遺跡群」の調査は、一步一步、その成果を上げて来たものと言えますし、また、生活の中に文化財をいかに位置付けていくかを考える手がかりをあたえてくれているものと考えます。こうした調査も多くの方々や有識者の御支援があってこそ、成果を上げられるものと思います。

62年秋、宮城町が、63年春、泉市と秋保町が仙台市の仲間入りし、新仙台市を形成しました。これからは、もっと広い視野に立って、「仙台平野の遺跡群」調査を行っていく必要があります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存でありますので、今後とも、御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶をいたします。

昭和63年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は昭和62年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書中、都山遺跡の調査報告は略報とし、詳細については、仙台市文化財調査報告書第110集「都山遺跡Ⅱ—昭和62年度発掘調査概報一」の中にまとめた。
3. 本書中の上色については「新版標準土色帖」(小山・佐原:1973)を使用した。
4. 本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」の一部である。
5. 実測図中の水系高は標高で示してある。
6. 実測図中の方位は磁北に統一してある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
7. 本文執筆は及川 格、中富 洋、千葉 仁、結城慎一が、編集は及川、中富、結城が担当した。
8. 陸奥国分寺跡の「遺跡の位置と環境」及び「東辺の調査 1. 基本層序」の執筆に際し、東北大学理学部地理学教室 豊島正幸氏の御教示を得た。記して感謝の意を表する。
9. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物と遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会で保管している。
10. 今年度の事業は昭和62年5月に着手し、昭和63年3月に終了した。

## 目 次

### 序 文 例 言

I. 調査計画と実績.....	1
II. 発掘調査報告.....	3
〔1〕陸奥国分寺跡.....	3
1. 遺跡の位置と環境    2. 調査経過    3. 調査の概要 (1)西辺の調査 (2)東辺の調査    4. まとめ	
〔2〕北目城跡.....	38
1. 遺跡の位置と環境    2. 調査経過    3. 基本層序    4. 発見遺構・出土遺物 5. まとめ	
〔3〕郡山遺跡.....	44
1. 第68次調査    2. 第69次調査    3. 第71次調査    4. 第72次調査	

## I. 調査計画と実績

現在の仙台市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、昭和62年11月1日の宮城町との合併、及び昭和63年3月1日の泉市、秋保町との合併により、これまでの旧仙台市域の425箇所に新たに225箇所を加え、650箇所に達している。これらの遺跡は、その一つ一つが先人の残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子とを現代に伝えるものである。われわれは、これらの文化遺産をわれわれの世代で消滅させることなく、次の世代へと継承していくべき責務を担っている。また、このような文化財保護の努力を続ける一方で、これらの文化遺産を学術研究の場にとどまらず、広く学校教育や社会教育の場、そして市民生活の中においても活用していく必要がある。しかし、ここ数年来の都市化に伴う公共事業や民間による開発行為の増加は、特に平野部において著しく、これらの遺跡の中にはそれによって破壊の危機にさらされているものも数多い。

当教育委員会では、これらの遺跡の範囲の確認と性格の究明のため、昭和56年度より国の補助を受け「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。7年目をむかえた今年度は、陸奥国分寺跡・郡山遺跡・北日城跡の3遺跡で計7箇所の発掘調査を実施した。

今年度の発掘調査計画と実績は以下の通りである。

### 1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査

個人住宅の建築等の小規模な開発に伴う発掘調査

### 2. 調査面積 662.5m<sup>2</sup>

### 3. 調査期間 昭和62年5月6日～12月22日

### 4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

(課長) 早坂春一

同課調査係

(係長) 佐藤 隆 (主事) 結城慎一、木村浩二、工藤哲司、及川 格、

中富 洋、宮崎 明、大江美智代 (教諭) 千葉 仁

同課管理係

(係長) 成田時雄 (主任) 岩澤克輔 (主事) 白幡靖子、山口 宏

調査・整理参加者 阿部喜美、相沢義徳、青柳 守、赤井沢サダ子、

赤井沢 進、赤井沢千代子、浅野ヤシ子、安斎直子、伊藤克則、伊藤隆行、

石堂恵称、小野寺 雄、小畠勝子、大内健一、岡崎徹郎、勝又洋行、小間昭文、

小林 充，小林康子，古賀克典，郡山和彦，紺野好章，佐藤あや子，  
 佐藤 均，佐藤浩道，下山田俊之，庄子錦一郎，庄司信哉，庄子 大，  
 鈴木かつ子，鈴木 進，鈴木正道，外川みつ子，田中さと子，田中千江，  
 武田芳子，根本辰江，針生系なよ，樋口 敏，前田裕志，八木啓介，  
 谷津和広，山田 太，若生久美，渡辺久幸

第1表 発掘調査実績表

事項		所在地	申請者(住所・氏名)	測量事由	対象面積	測量面積	調査期間
陸奥 岡分寺跡	西 邊	仙台市 木ノ下二丁目67-3	—	造構確認測定	212m <sup>2</sup>	212m <sup>2</sup>	昭和62年 7月9日～ 8月27日
	東 邊	仙台市 木ノ下三丁目3-20	—	造構確認測定	137m <sup>2</sup>	137m <sup>2</sup>	10月26日 11月1日 12月22日
郡山城跡	第68次 発掘調査	仙台市 郡山三丁目117-1 117-2	仙台市 世野 亮太	共同住宅新築	383.22m <sup>2</sup>	380m <sup>2</sup>	5月9日 5月27日
	第69次 発掘調査	仙台市 郡山三丁目2-2	仙台市 菅野 秀夫	住宅新築	224.01m <sup>2</sup>	50m <sup>2</sup>	5月27日 6月4日
	第71次 発掘調査	仙台市 郡山二丁目127-15	仙台市 長町南二丁目12-35	住宅新築	389.73m <sup>2</sup>	55.5m <sup>2</sup>	9月1日 10月16日
	第72次 発掘調査	仙台市 郡山三丁目5-1	仙台市 赤井 信一	住宅新築	1542.56m <sup>2</sup>	39.5m <sup>2</sup>	10月5日 10月16日
	北目城跡(郡山市第73次) 発掘調査	仙台市 郡山四丁目128-13 128-25	仙台市 大原 春雄	共同住宅新築	688.36m <sup>2</sup>	58.5m <sup>2</sup>	11月9日 11月25日

(及川 格)

## II. 発掘調査報告

### [1] 陸奥国分寺跡

#### 1. 遺跡の位置と環境

陸奥国分寺跡は仙台市東部の仙台市木ノ下二丁目、三丁目に所在し、JR仙台駅の東南東約2kmの位置にある。本遺跡の西側には仙台市長町より宮城郡利府町にのびる南西から北東方向の長町一利府線とよばれる地質構造線があり、南東側の海岸低地（宮城野海岸平野）と北西侧の段丘・丘陵部との地形境界をなしている。<sup>(注)</sup>本遺跡は長町一利府線の北西側の中町段丘の延長部分にあたるが、地形的には宮城野海岸平野の西端部に位置する。標高は15mから17mで、北西から南東へ向かって徐々に低くなっている。陸奥国分寺跡の東方約600mには陸奥国分尼寺跡があり、北東約9.5kmには陸奥国府多賀城跡及び多賀城廃寺跡がある。また陸奥国分寺跡を含むこれらの遺跡に瓦を供給した台の原、小田原窯跡群は北方約3kmにある。

昭和43年度以来、当教育委員会は国の補助を受け、上地の買収を行ない環境整備を進めているが、昭和10年代からの宅地化によって、陸奥国分寺跡の北半部は宅地となっている部分が多い。（及川 格）

#### 2. 調査経過

仙台市教育委員会では昭和43年度から土地の買収に着手して、陸奥国分寺跡の保護をはかつてききた。また昭和47年度からは地下の遺構を地上に復元するなどの環境整備事業を実施している。整備事業にあたっては、復元設計の基礎資料を得るために、随時遺構の確認調査を実施しているが、本年度は西辺及び東辺の進捗確認調査を行なった。

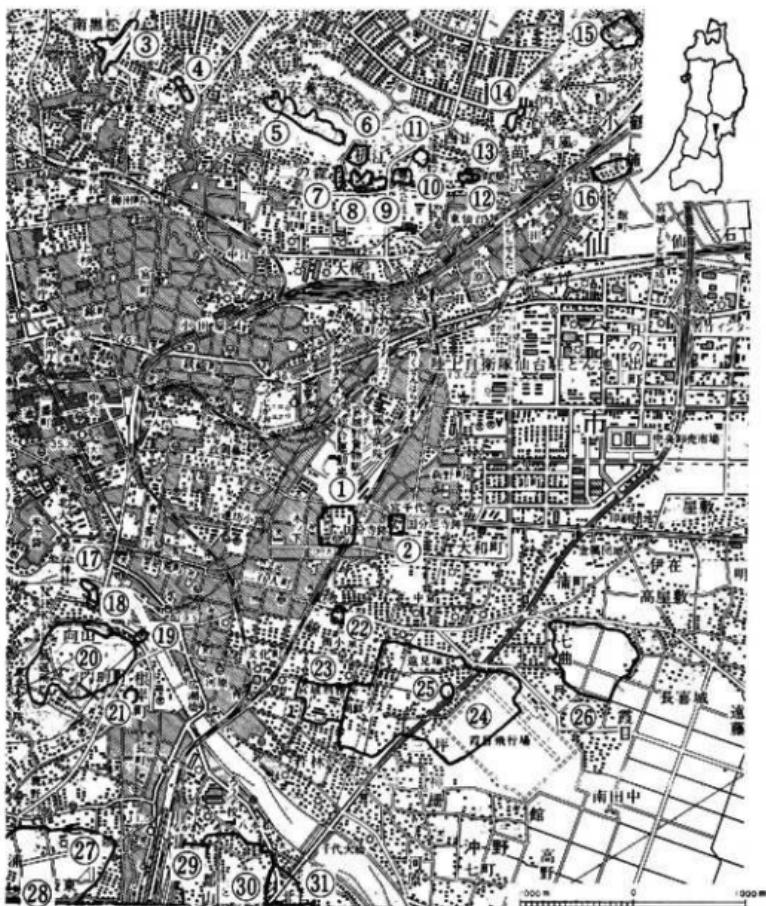
西辺調査区は昭和62年7月9日に調査を開始し、同8月27日に埋め戻しを完了したが、調査終了近くの8月26日には、地元住民を対象とした現地説明会を実施した。

調査区は寺城西辺の、ほぼ真北方向に延びる掘立柱列延長線の西側約5mに9m×30mの人大きさで設定した。また、調査区南半の任意の点を原点（N-0-S, E-0-W）とし、ここから磁北方向に基準線を設けた。これをもとに調査区内に6m×5mのグリッドを設定して、遺構実測を行なった。

東辺調査区は昭和62年10月26日に調査を開始し、同12月22日に埋め戻しを完了した。調査区は排土の關係等から畠地の北側に東辺築地の推定位置を含むようにして、南北7m、東西18mの東西方向に設定した。また、調査区外の南西の任意の位置に測量基準原点（N 0・E 0）を設け、測量基準線は調査区の方向に合わせて設定した。測量基準線の方向はN-3°-Eである。

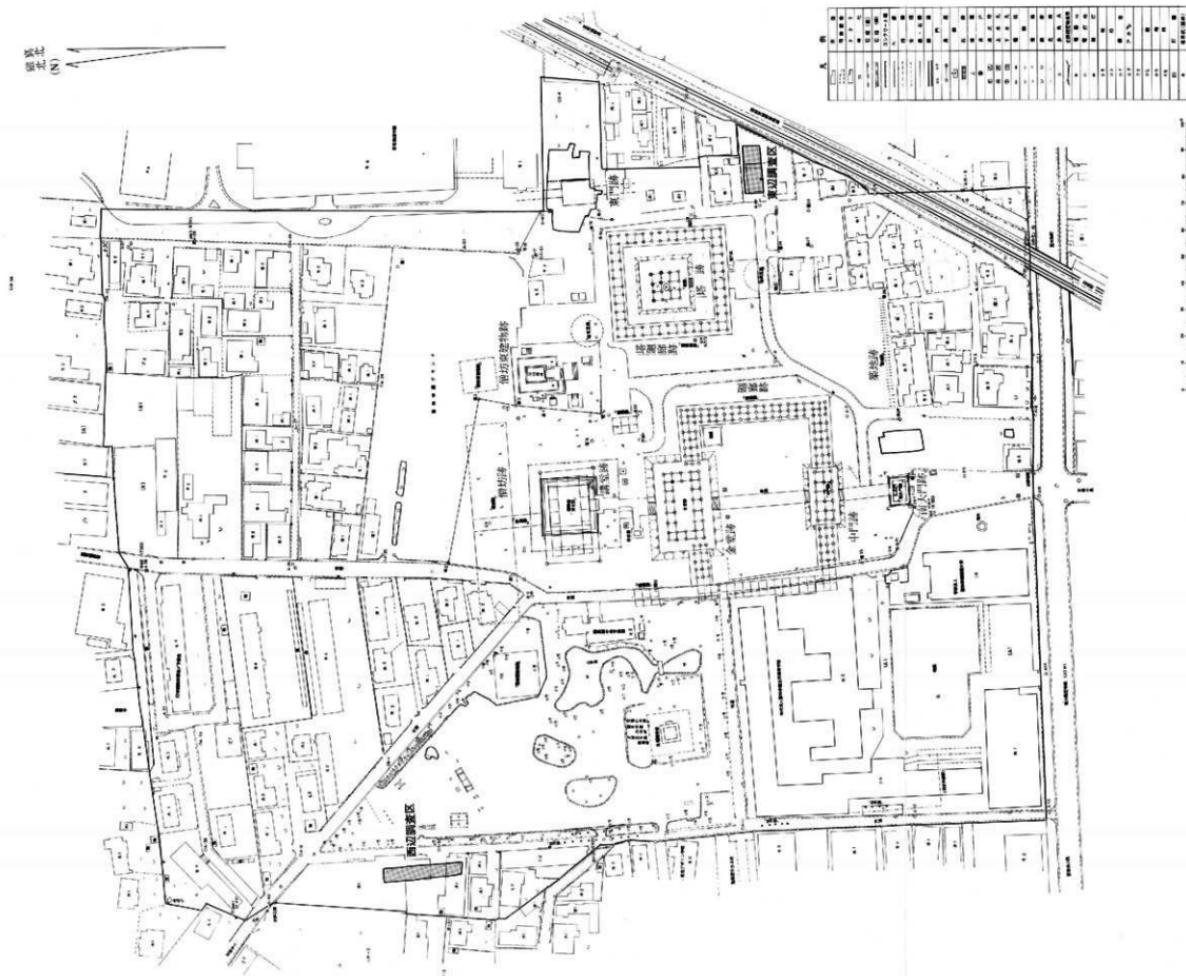
（注）地学同体研究会仙台支部編 1980「仙台の平野と段丘の生い立ち」『新編仙台の地学』PP.5~30

中川・大槻・今泉 1976「仙台平野西縁・長町一利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』第28卷  
第2号 PP.111~120  
（及川・中富）



- |             |            |             |            |           |
|-------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 陸奥国分寺跡   | 2. 陸奥国分尼寺跡 | 3. 五本松塚跡    | 4. 南光沢塚跡   | 5. 与兵衛沼塚跡 |
| 6. 桥江遺跡     | 7. 二ノ森遺跡   | 8. 神明社裏遺跡   | 9. 土手前窓跡   | 10. 土手前窓跡 |
| 11. 安養寺下窓跡  | 12. 大蓮寺窓跡  | 13. 室内古墳    | 14. 善心寺横穴群 | 15. 蒲沢遺跡  |
| 16. 小鶴城跡    | 17. 爰宕山樓穴群 | 18. 大年寺山横穴群 | 19. 宗禪寺横穴群 | 20. 茂ヶ崎城跡 |
| 21. 犬塚古墳    | 22. 法頭塚古墳  | 23. 若林塚跡    | 24. 南小泉遺跡  | 25. 遠見塚古墳 |
| 26. 仙台東郊条里跡 | 27. 富沢遺跡   | 28. 余崎塚遺跡   | 29. 西台塚遺跡  | 30. 那山道路  |
| 31. 北目城跡    |            |             |            |           |

第1図 周辺の遺跡



第2圖 現在位置圖

### 3. 調査の概要

#### (1) 西辺の調査

##### 1. 基本層序 (第3図)

当調査区の基本層序は、大きく4層以上に分けることができる。

現地表より90~130cm下で遺構検出面である第IV層が検出されるが、全体に北から南へ向つての傾斜がみられる。以下、各々の層について記す。

表土は厚さ30cm~60cmで、擾乱が著しい。

I層は畑の耕作などにより動かされた層で、層厚は30cm~60cmを計る。a~fの6層に分けられる。いずれも粘土質シルトで、褐色(a, b)、にぶい黄褐色(c, f)、暗褐色(d)、黒褐色(e)を呈する。

層のところどころに大、小の礫を含んだり(a, d, c, f)、黄褐色上のブロック状の混入(b, c)が観察される。

II層は国分寺造営に伴う整地のための積み土と考えられ、a~eの5層に分層できる。層厚は5cm~40cmであるが、調査区南端部ではほとんど観察できない。

土質は全て粘土質シルトでよくしまっている。土色は黄褐色(a, c, d, e)、または褐色(b)を呈するが、これにIVb層の構成上と考えられる明褐色土がブロック状に混入している。

(注2)  
この層は塙を構築する際に、北から南への傾斜を緩和するために人为的に積まれたものと思われ、SD1溝跡西側には分布しない。

III層は旧表土と考えられる層で、a, b, cの3層に分けられる。厚さは30cm~50cmである。いずれも粘土質シルトで、土色は順に褐色、黒褐色、にぶい黄褐色である。

なお、この層は北から南に向けての傾斜がみられ、全長約29m 30cmの東壁において、72cmのレベル差を計る。

遺構検出面であるIV層は、a, bの2層に分層することができるが、やはり北から南へ傾斜しており、東壁北端と南端で70cmのレベル差を計る。黄褐色シルトのIVa層は調査区北半に、黄褐色のシルト質粘土であるIVb層は南半に分布するが、両層の間では疊層が検出され、この層の分布はみられない。(第4図)

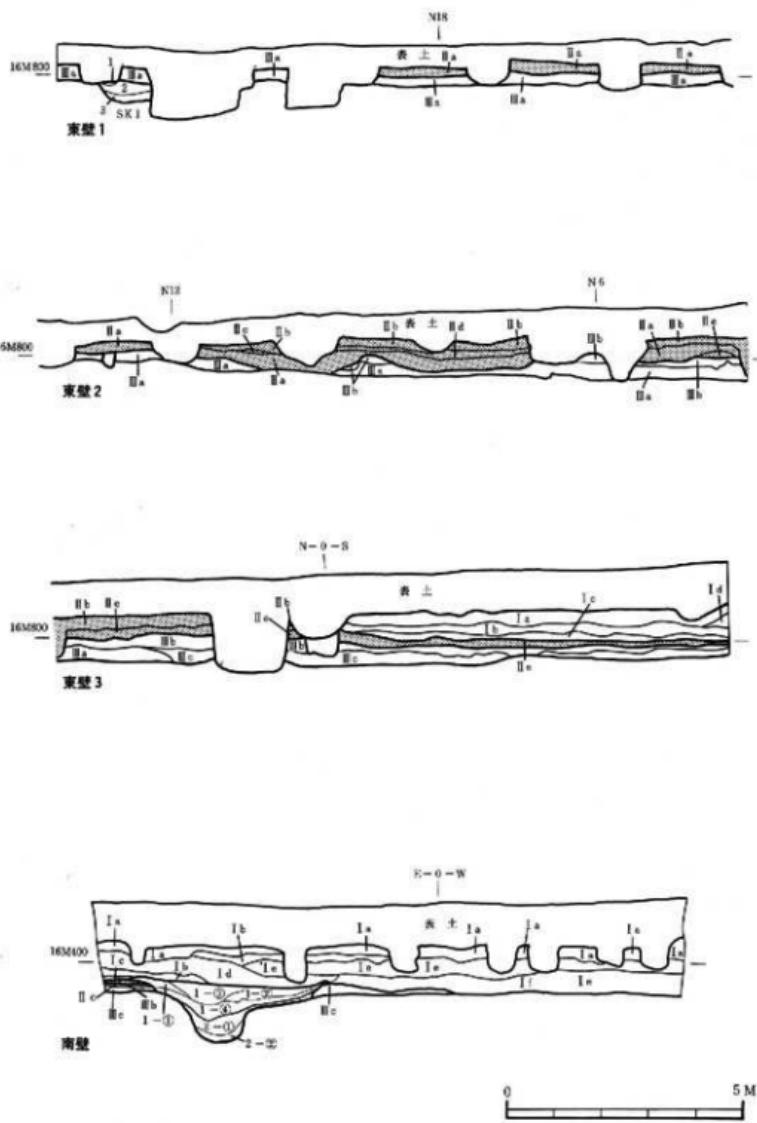
##### 2. 発見遺構 (第4図、図版2・3)

##### SD1溝跡

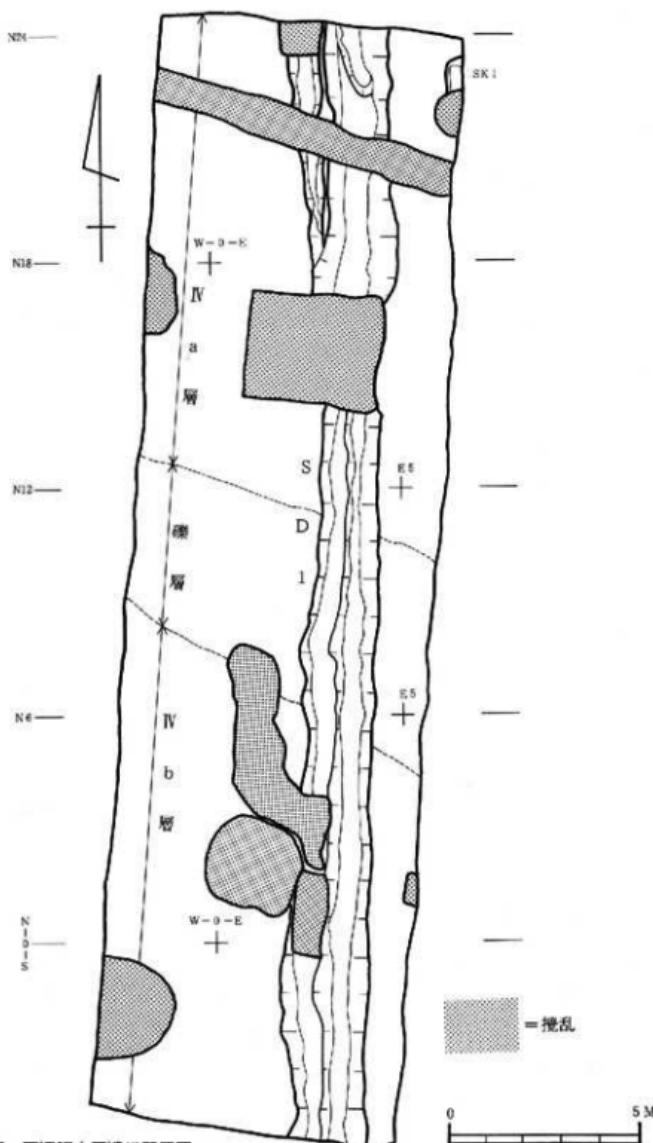
調査区を南北に縱断する溝跡。方向はN-1.5°-Eで、ほぼ磁北を指している。

上幅150cm~230cm、底幅30cm~90cmで深さは75cm~90cm程度、南に傾斜している。

西壁は段掘りがなされているために縁を形成するが、北端付近で一部変化がみられる。東壁



第3図 調査区断面図



第4図 西辺調査区遺構配置図

は緩やかに立ち上る。

堆積土は大きく上下2層に分けることができる。上層の1層は暗褐色のシルト質粘土で、古瓦破片、須恵器破片、土師器小破片が出土した。下層の2層は黒褐色のシルト質粘土で、古瓦破片、土師器小破片などが出土した。

なお、この溝跡は国分寺跡西辺の掘立柱列延長線に平行して延びるもので、昭和34年及び57年の調査で確認された溝跡の延長であると考えられる。  
(注3)  
(注4)

堀跡と思われる掘立柱列の外側に、これと平行して掘られていること、またこの溝跡の西側には整地のための積み土が分布しないことなどから、寺院域を区画する施設であったものと推測される。

### S K 1 土坑

調査区北東コーナー付近で検出された。

東壁に接しているうえ、南側を擾乱に切られているため、平面形の全貌は知り得ないが、残存部分は方形を呈している。

残存部分長軸90cmで深さは最深部で30cm程を計る。

堆積土は3層に分かれ、暗褐色または褐色のシルトでいずれもしまりが強い。

遺物の出土はない。

### 3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土師器、須恵器、瓦であるが、中でも瓦類が大半を占めている。しかしながら遺物の総量はコンテナ（テンバコ27）1箱にすぎず、しかも小破片がほとんどであったため、遺物の全容を知ることはできなかった。

遺物の出土はⅢ層からのものが最も多く、これにSD1堆積土出土のものが次ぐ。

#### ①土師器

土師器はSD1溝跡及びⅢ層から33点の小破片が出土したが、磨滅が著しく、接合を行なえたものもなかった。

内面を黒色処理されたロクロ使用壺の底部が4点確認できたが（うち1点は高台付壺）、底部切り離しは全て回転糸切りで、そのうち2点は切り離し後にヘラケズリを施している。

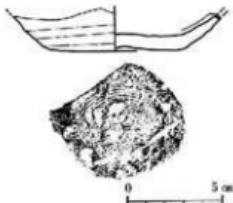
底部以外の小破片はいずれもロクロ使用壺の体部で、内面は黒色処理を受けている。

#### ②須恵器（第5図、図版1）

出土量が少なく、しかも親指大から豆粒大の破片がほとんどであるが、1点のみ接合、図化をなしえた。（第5図）

これはSD1溝跡からの出土で、器形は壺である。底部切り離しは回転糸切りである。

第5図 遺物実測図—須恵器—



図版1 出土遺物—須恵器—

## ③瓦

瓦はSD1溝跡からの出土が最も多く、Ⅲ層からのものがこれに次ぐ。東壁1層からも1点のみ出土した。

種類は軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦であるが、量的には平瓦破片が最も多い。

以下分類については、「陸奥国分寺跡」(1961、陸奥国分寺跡発掘調査委員会編)の分類基準に基づいている。

## 軒平瓦（第6図-1、図版5-1）

軒平瓦は偏行唐草文（第1類）が1点、調査区東壁1層より採取された。

瓦当面は、右から左に太い隆線で唐草文が走り、その上下に連珠が配されている。額部は深頸で無文であるが、朱が付着している。

額部は刷毛目調整が施され、段部を幅の広いヘラ状工具でナデつけている。平瓦凸面は網叩きの後、ナデ調整によるスリケシを受けている。

凹面の瓦当部と平瓦の接合部はヘラケズリが施され、側端はナデ調整を受けている。また凹面には布目痕が観察される。

側面にはヘラケズリ調整が行なわれている。

## 軒丸瓦（第6図-2、図版5-2）

重弁蓮華文軒丸瓦（第6類）が1点、SD1溝跡から出土した。中房より下部は欠損しており、8葉のうち5葉の花弁を残す。瓦当直径は、17.2cmを計る。

蓮子構成は1個の中心蓮子に4個の周縁蓮子を配したもので、周縁蓮子の方向は、弁中央線に一致する。蓮弁及び小蓮弁は、ともに先端に丸味を帯びている。瓦当裏面の調整はヘラナデであるが、丸瓦との接合部分は指ナデが行なわれている。

丸瓦部凸面及び側面はヘラケズリが施されており、凹面には、布目痕が観察される。

## 平瓦

今回の調査では、平瓦片の出土が量的には最も多いが、小破片がほとんどでしかも磨滅が激しく、接合をなしえたものは1点もない。凹、凸面の器面調整の組合わせを観察すると、今回

出土した半瓦は概ね次の6種類に分けることができる。

- ① 凹面・粗い布目痕、凸面・縦方向の繩叩き（第7図-1、図版5-3）
- ② 凹面・粗い布目痕、凸面・斜方向の繩叩き（第7図-3、図版6-3）
- ③ 凹面・布目痕、凸面・斜方向で細い繩叩き（第7図-5、図版6-2）
- ④ 凹面・細かい布目痕、凸面・斜方向の繩叩き後、スリケシ（第7図-2、図版6-1）
- ⑤ 凹面・細かい布目痕、凸面・斜方向の粗い繩叩き（第6図-3、図版5-4）
- ⑥ 凹面・細かい布目痕、糸切り痕、凸面・平行叩き（第7図-4、図版6-4）

このうち最も多くみられるのが①のタイプで、⑥のタイプは稀である。

### 丸瓦

小破片が3点出土したが、いずれも状態が悪く、図化を行なうことはできなかった。

3点とも玉縁つきの有段丸瓦で、凸面はナデ調整を受けており、凹面には布目痕が観察される。側面はヘラケズリである。

### 注

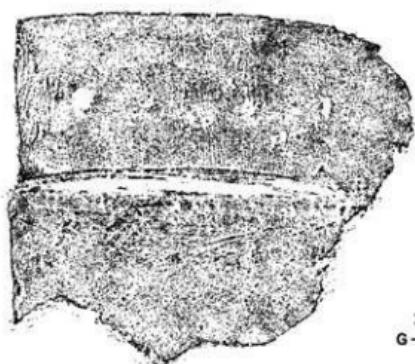
(注1) 従来の国分寺跡調査の報告で、地山層と呼称されていた層に相当する。

(注2) 昭和34年の第5次調査で、寺域西辺に南北に延びる2列の掘立柱列が検出されており、築地のような堀の存在が推測される。

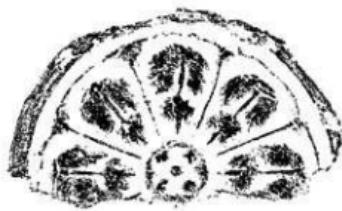
(注3) 前注の掘立柱列。この方向はN-3.5°-Eで、SD1の方向とはほぼ一致する。

(注4) 昭和57年の調査では、検出された1条の溝跡を2条の溝の重複として報告しているが(1983, 加藤・金森『仙台平野の遺跡群』Ⅱ、仙台市教育委員会)、これは堆積土の相違で、一条の溝と理解するのが妥当であろう。

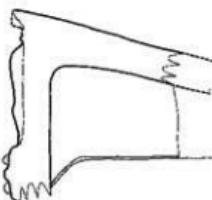
(中宮 洋)



1  
G-1



2  
F-1

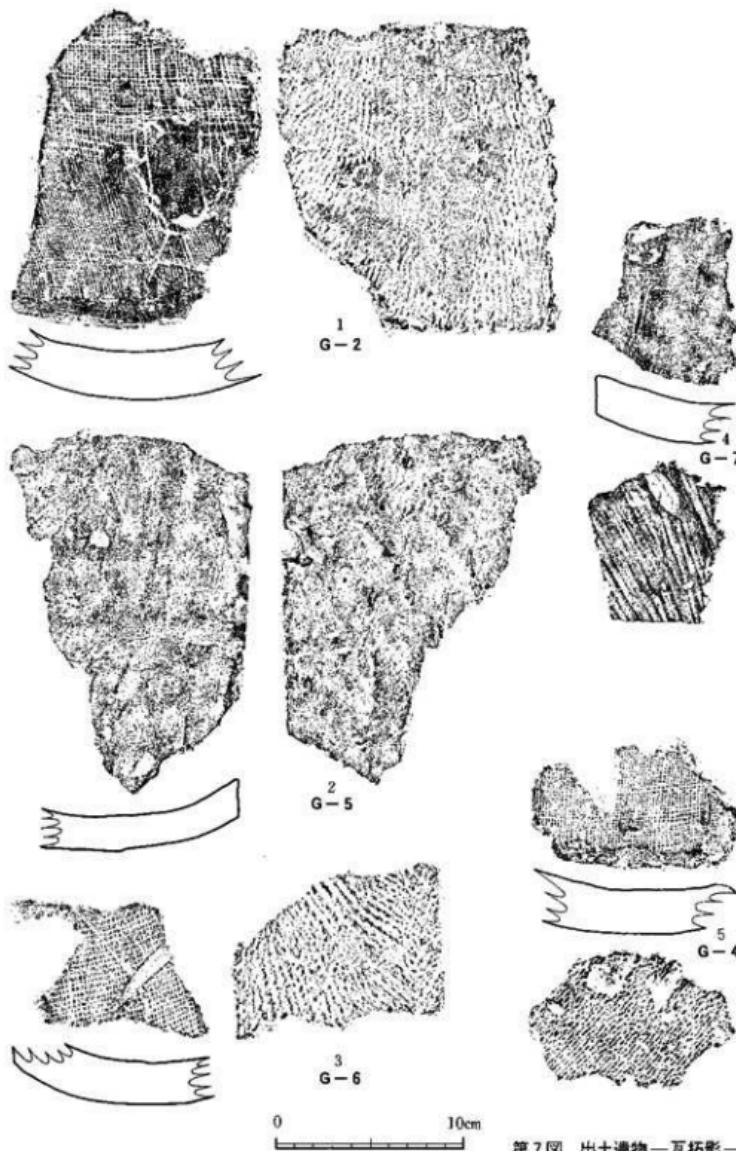


3  
G-3



0 10cm

第6図 出土遺物—瓦拓影—



第7図 出土遺物—瓦拓影—

図版2  
調査区全景  
(北より)



図版3  
調査区南壁断面  
(北より)

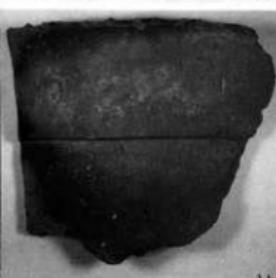


図版4  
調査区東壁断面  
(西より)





1 a



1 b



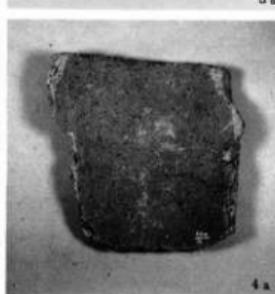
2



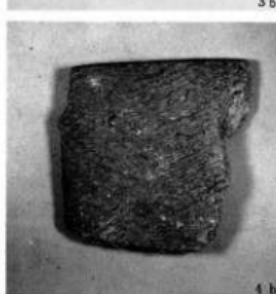
3 a



3 b



4 a



4 b

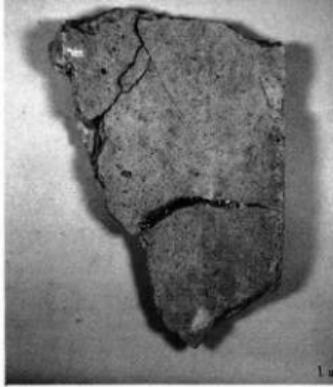
1. G-1 舟平瓦

2. F-1 舟丸瓦

3. G-2 平瓦

4. O-3 平瓦

## 图版5 出土遗物



1 a



1 b



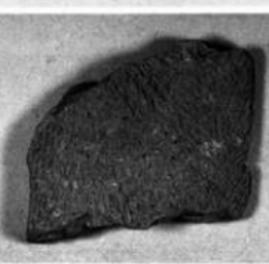
2 a



2 b



3 a



3 b



4 a



4 b

1. G-5 平瓦  
2. G-4 平瓦  
3. G-6 平瓦  
4. G-7 平瓦

図版6 出土遺物

## (2) 東辺の調査

### 1. 基本層序

今回の調査区は買収以前は宅地となっていた箇所であり、その際になされたと思われる整地、盛土が確認された。整地は2度行なわれており、盛土B-1が腐植土であることから1度目の整地がなされてから2度目の整地がなされるまでの間にある程度の時間経過があったことがよみとれる。盛土B-3は古代の遺物からつい最近の陶器等までを多く含んでいるが、それ以外の盛土にはあまり見られない。

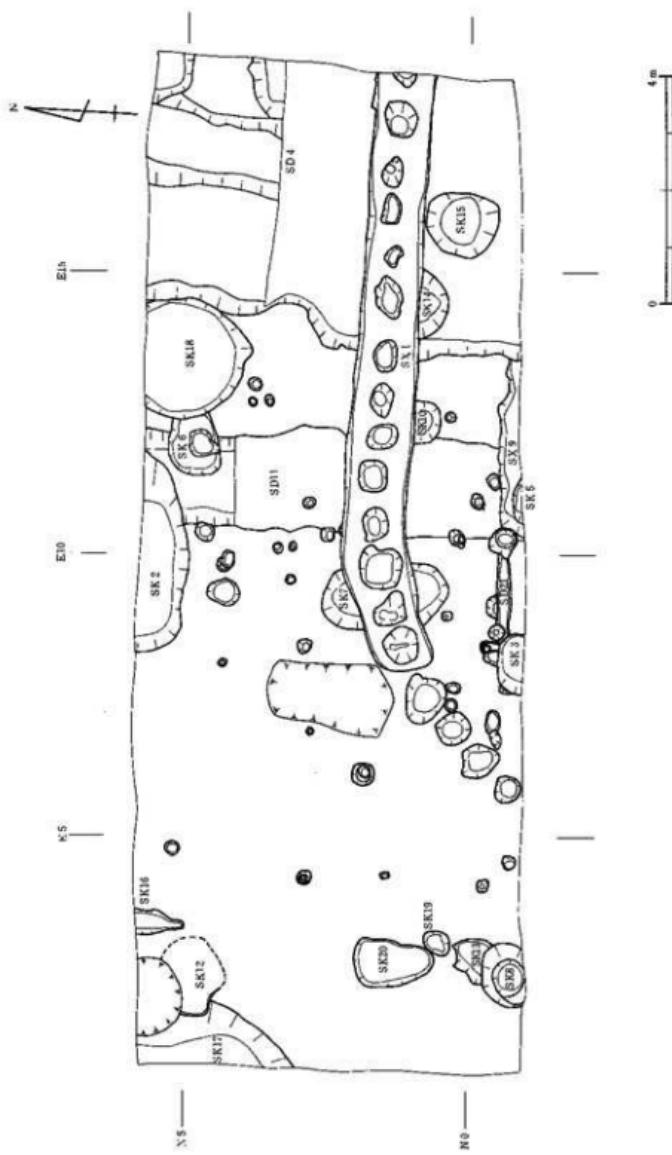
第Ⅰ層は褐色(10YR 5%)を呈するシルト質粘土層で、調査区全域に分布している。第Ⅱ層は黒褐色(10YR 3%)を呈するシルト層で調査区の西側にのみ分布する。第Ⅲ層は明黄褐色(10YR 6%)を呈するローム層であり、調査区西壁近くに分布するいくつかの遺構を除き、今回の調査によって検出された遺構のほとんどは、この層の上面が検出面となっている。層序確認のためSD4溝跡の底面を部分的に掘り下げた結果、第Ⅲ層は下部へいくに従って徐々に砂質化していること、また第Ⅲ層の下には礫層があることが確認された。礫層の深さは第Ⅲ層上面から約1.2m、現地表面から約1.8mであり、礫層上面の標高は約13.2mである。この礫層は、陸奥国分寺跡が中町段丘の下流延長部分にあたるという位置的関係から、中町段丘の段丘礫層に連続するものと考えられる。

なお、盛土B-3の上半部までの堆土は、数ヶ所に設けたテストピットを参考にしながら東辺築地推定位置を中心とした東西約5m幅を残し、重機によって行なった。それ以外はすべて人力によって第Ⅰ層下面まで掘り下げて遺構検出作業を行なった。

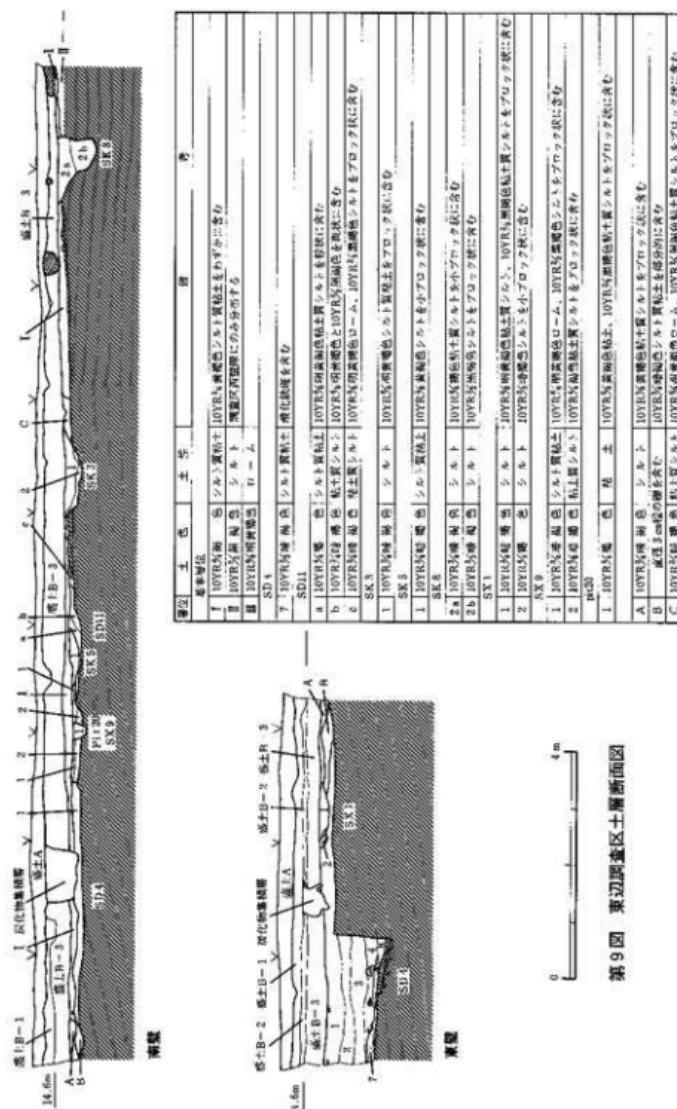
### 2. 発見遺構

今回の調査によって発見された遺構は、溝跡3条、土坑16基、不明遺構2基、小柱穴・ピット39である。第Ⅱ層が分布する調査区西壁際のSK8・12・13・17・20は第Ⅱ層上面が検出面となっているが、それ以外の遺構はすべて第Ⅲ層上面で検出している。今回の調査では調査区を東辺築地の推定位置を含むように設定したが、築地の本体もまた基礎部分も確認することはできなかった。また、第Ⅱ層が分布する範囲は他の部分より一段高くなっている、約15cmの高低差がある。従って調査区西壁際の第Ⅱ層の分布する箇所以外においても、本来は第Ⅱ層が分布していたものと思われ、後世の削平によって第Ⅱ層及び第Ⅲ層の一部が削平を受け、それによって第Ⅲ層が遺構検出面となったものと考えられる。

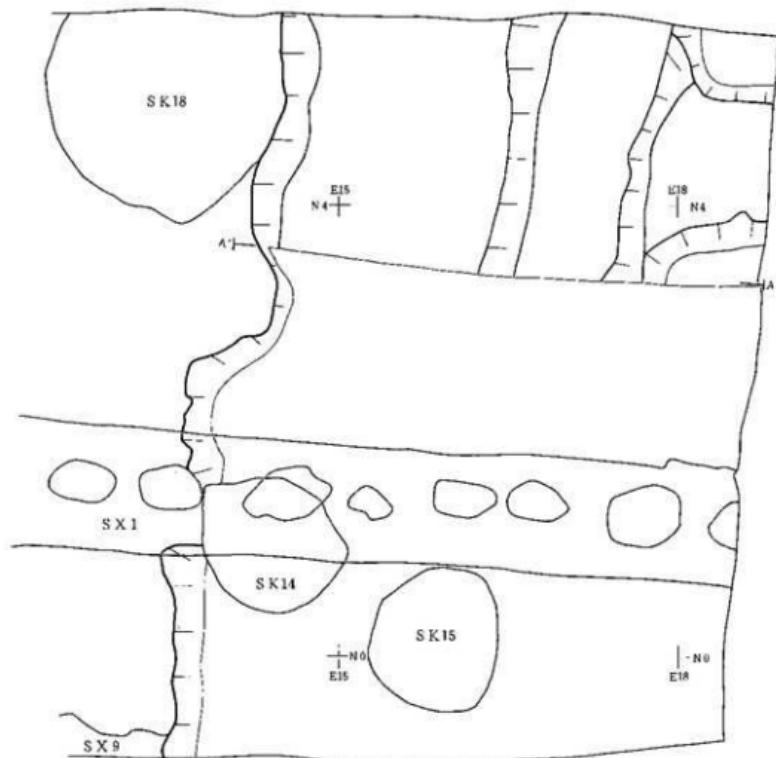
**SD4溝跡** 調査区東壁際において確認された南北方向に延びる階段状に段掘りされた溝跡である。上幅5.1m以上、下幅1.1m以上、深さ87~109cmで、底面には部分的な凹凸が見られる。検出分の総長は6.75mであるが、更に南北へ続いていると考えられる。堆積土中より軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片、土器器片、鉄釘の他、近世以降の平瓦・丸瓦片、陶器片が出土した。



第8回 東沢調査区遭難配達団



第9圖 東邊調查區土層斷面圖

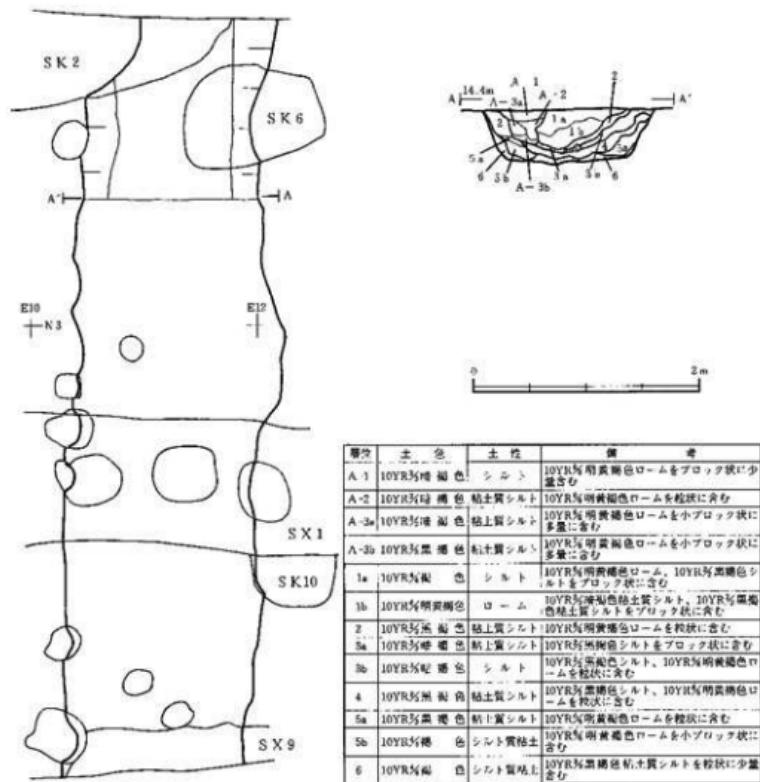


第10図 SD 4溝跡 平面図・断面図

層位	土色	土性	圖 名
1	10YR 4/3 黒褐色	粘土質シルト	10YR 4/3 黒褐色シルトを粒状に含む
2	10YR 4/2 單褐色	粘土質シルト	10YR 4/2 單褐色シルト更に上、10YR 4/3 黄褐色ロームを少ブロック状に含む
3	10YR 4/2 黑褐色	粘土質シルト	10YR 4/2 黑褐色シルトを粒状に少量含む
4	10YR 4/2 黑褐色	シルト質粘土	層の内に発化黒色をうすい層状に含む
5	10YR 4/2 黄褐色	ローム	10YR 4/2 黄褐色粘土質シルトを少ブロック状に含む
6a	10YR 4/2 單褐色	粘土質シルト	層の内に10YR 4/2 黑褐色ロームを帶状に含む
6b	10YR 4/2 黑褐色	シルト質粘土	10YR 4/2 黑褐色ロームを層の下位に各段に含む
8	10YR 4/2 黑褐色	粘土	10YR 4/2 黄褐色ロームをブロック状に含む

している。SK18, SX9を切っており、SK14・15, SX1に切られている。

**S D 11溝跡** 上幅150~170cm、下幅100~110cm、深さ40~46cmの溝跡であり、方向はN-5°~Eで、ほぼ真北方向である。底面はほぼ平坦で断面形は逆台形を呈する。検出分の総長は6.7mであるが、更に南北に続いていると考えられる。堆積土中より丸瓦・平瓦片が出土している。SK 2・5・6・10, SX 1・9に切られている。

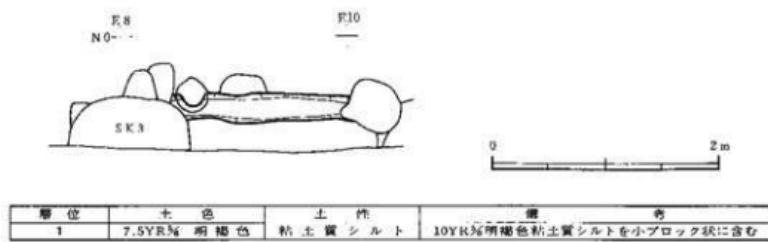


第11図 SD11溝跡 平面図・断面図

**S D 21溝跡** 上幅19~25cm、下幅11~20cm、深さ6~12cm、長さ1.6mの溝跡である。底面はほぼ平坦で断面形は扁平な逆台形を呈する。SK 3に切られている。

**SK 2 土坑** 90cm以上×360cm以上の規模で深さは60cmであり、底面には若干の凹凸が見られる。調査区北壁際で部分的に検出いただけであるため、更に北側へ延びるものと考えられるが詳細は不明である。堆積土中より軒丸片、丸瓦・平瓦片、土師器片、近世以降の丸瓦・平瓦

瓦片及び陶器片が出土している。SD11を切っている。



第12図 SD21溝跡 平面図



第13図 SK2 土坑 平面図・断面図

**SK3 土坑** 46cm以上×108cmの不整円形と推定され、深さは10cmであり底面はほぼ平坦である。SD21を切っている。

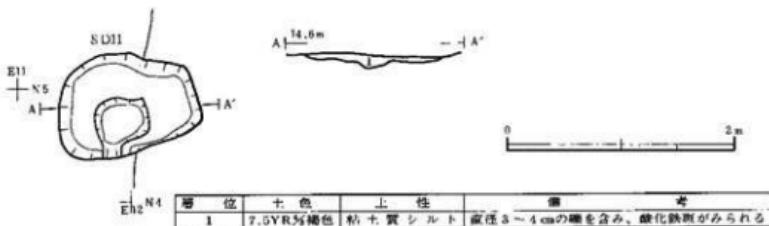
**SK5 土坑** 16cm以上×82cm以上の規模で深さは20cmである。調査区南壁際で部分的に検出したのみであるため、詳細は不明である。堆積土中より丸瓦・平瓦片が出土している。SD11、SX9を切っている。



第14図 SK3 土坑 平面図

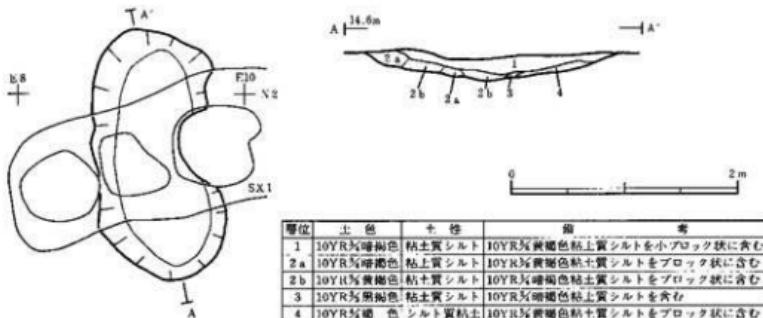
第15図 SK5 土坑 平面図

**SK6 土坑** 短軸92cm、長軸126cmの不整橿円形を呈し、深さは14cmである。底面はゆるやかに窪んでおり中央部では急に窪む。SD11、SK18を切っている。



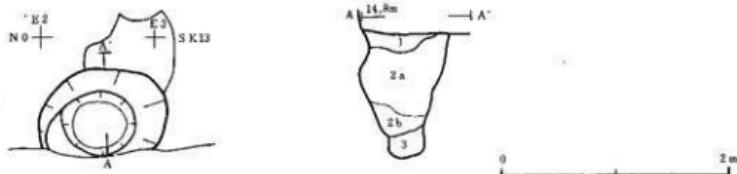
第16図 SK 6 土坑 平面図・断面図

**SK 7 土坑** 短軸115cm、長軸230cmの楕円形を呈し、深さは28cmである。底面はゆるやかに窪んでおり、断面形は開いたU字形を呈する。堆積土中より丸瓦、平瓦片、土師器片が出土している。SX 1に切られている。



第17図 SK 7 土坑 平面図・断面図

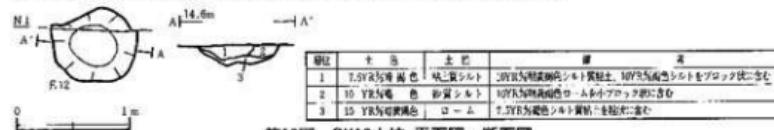
**SK 8 土坑** 82cm以上×118cmの不規則形を呈するものと推定され、深さは114cmである。柱穴状の土坑であり、底面は直径40cm程の円形を呈している。堆積土中より軒丸瓦片、丸瓦・平瓦片、土師器片が出土している。SK 13を切っている。



層位	土色	上性	備考
1	10YR 5号暗褐色	シルト	10YR 5号暗褐色シルトを含む、10YR 5号褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
2a	10YR 5号暗褐色	シルト	10YR 5号暗褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
2b	10YR 5号暗褐色	シルト	10YR 5号暗褐色シルトをブロック状に含む
3	10YR 5号褐色	シルト	10YR 5号暗褐色シルトをまだらに含む

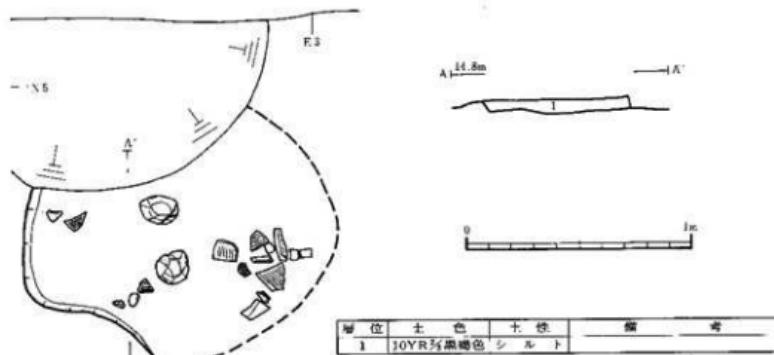
第18図 SK 8 土坑 平面図・断面図

**S K 10土坑** 直径65cm程の不整円形を呈し、深さは19cmである。底面はほぼ平坦で断面形は開いたU字形を呈する。S D 11を切っており S X 1に切られている。



第19図 SK10土坑 平面図・断面図

**S K 12土坑** 短軸83cm以上、推定長軸140cmの不整円形を呈するものと推定され、深さは7cmである。底面はほぼ平坦で断面形は扁平なU字形を呈する。この土坑からは丸瓦・平瓦片のほか、ほぼ完形の赤焼土器が2点出土している。S K 17を切っている。



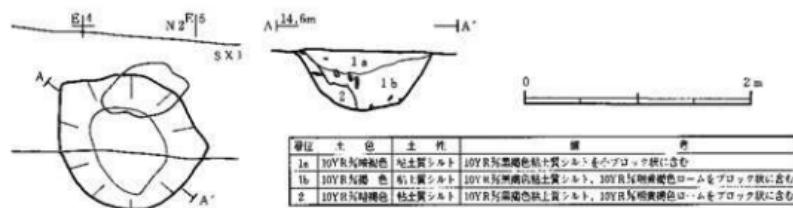
第20図 SK12土坑 平面図・断面図

**S K 13土坑** 65cm以上×77cmの規模で、深さは18cmであるが、SK 8に切られているため全形は不明である。底面はほぼ平凹で断面形は開いたU字形を呈する。堆積土中より平瓦片が出土している。SK 8に切られている。



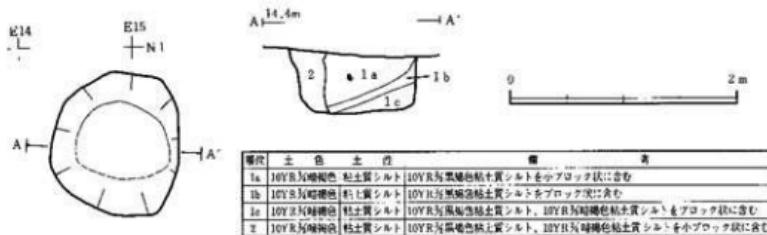
第21図 SK13土坑 平面図・断面図

**S K 14土坑** 短軸116cm、長軸139cmの不整円形を呈し、深さは55cmである。底面はほぼ平坦で断面形はU字形を呈する。堆積土中より軒丸瓦片、丸瓦・平瓦片、上師器片、須恵器片が出土している。S D 4を切っており、S X 1に切られている。



第22図 SK14土坑 平面図・断面図

**SK15土坑** 短軸113cm、長軸128cmの不整円形を呈し、深さは69cmである。底面はほぼ平坦で断面形はU字形を呈する。堆積土中より軒丸瓦片、丸瓦・平瓦片、道具瓦片、土師器片、鉄釘等が出土している。SD4を切っている。



第23図 SK15土坑 平面図・断面図

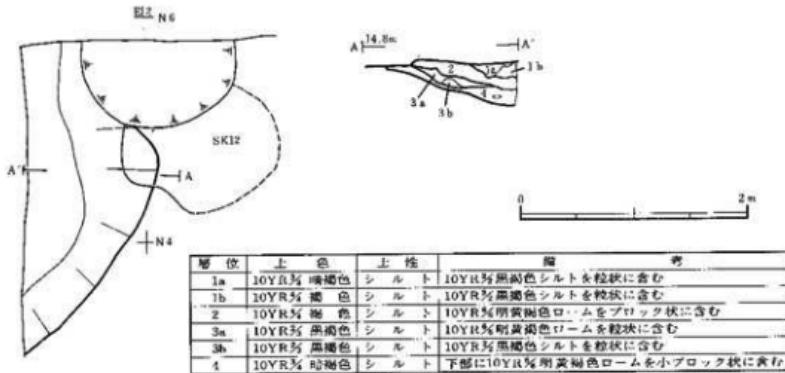
**SK16土坑** 45cm×85cm以上の規模で、深さは12cmであり、底面には凹凸があり断面形は浅いU字形を呈する。調査区北壁際で部分的に検出したのみであるため、更に北側へ延びるものと考えられるが、詳細は不明である。



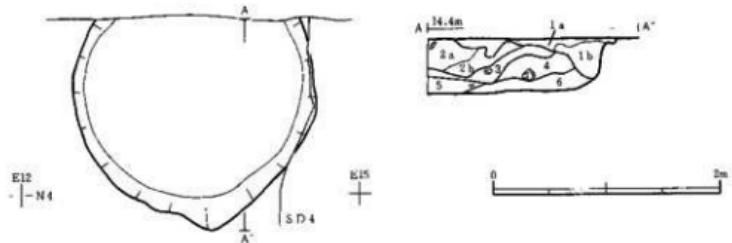
第24図 SK16土坑 平面図・断面図

**SK17土坑** 116cm以上×252cm以上の規模で、深さは42cmであり底面はゆるやかに窪んでいる。調査区北西隅で部分的に検出したのみであるため更に北西へ延びるものと考えられるが、詳細は不明である。堆積土中より丸瓦・平瓦片が出土している。SK12に切られている。

**SK18土坑** 調査区北壁際で検出された土坑で直徑215cm程の円形を呈すると推定され、深さは50cmである。底面はほぼ平坦で断面形は逆台形を呈する。堆積土中より丸瓦・平瓦片、土師器片、近世以降の瓦片が出土している。SD4、SK6に切られている。

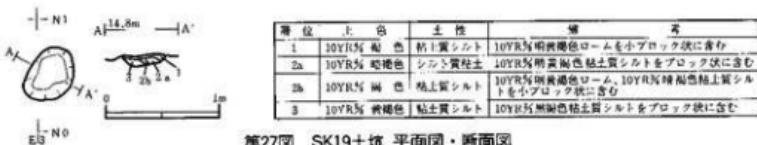


第25図 SK17土坑 平面図・断面図



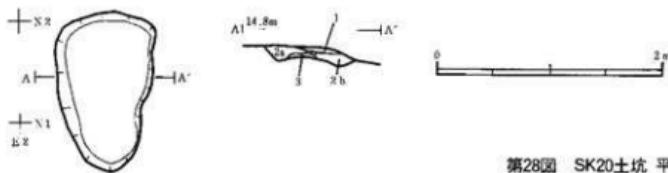
第26図 SK18土坑 平面図・断面図

**S K 19土坑** 短軸39cm・長軸53cmの不整円形を呈し、深さは11cmである。底面はほぼ平坦で断面形は開いたU字形を呈する。



第27図 SK19土坑 平面図・断面図

**S K 20土坑** 短軸87cm、長軸142cmの不整円形を呈し、深さは18cmである。底面はほぼ平坦で断面形は開いたU字形を呈している。堆積土中より丸瓦・平瓦片が出土している。

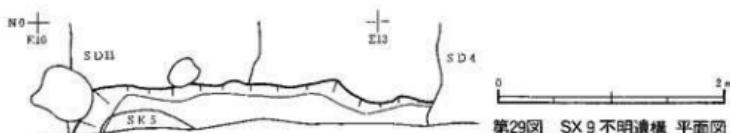


第28図 SK20土坑 平面図・断面図

層位	土色	上性	標
3	10YR5/4褐色	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色粘土質シルト、10YR5/4黑褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
2a	10YR5/4褐色	粘土質シルト	10YR5/6黄褐色粘土質シルト、10YR5/4黑褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
2b	10YR5/4暗褐色	粘土質シルト	10YR5/6暗褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む
3	10YR5/4黃褐色	粘土質シルト	10YR5/6暗褐色粘土質シルトを小ブロック状に含む

**S X 1 不明遺構** 上幅98~120cm、下幅75~110cm、深さ7~13cmの溝状の遺構の中央部に直径36~84cmの不整円形のビット18を有する遺構である。調査区東壁際より西へ直線的に伸びてきており、調査区中央部で南へ向かってゆく弧を描いている。弧を描きはじめてからすぐに溝状部分は途切れ、中央部の不整円形のビット群の延長と思われるビットが南壁際まで続いている。溝状部分の両壁際には古代の瓦片をはじめ、近世以降の瓦片・陶器片・土師質土器片・礫が帶状に分布している。SD 4・11、SK 7・10・14を切っている。

**S X 9 不明遺構** 30cm以上×323cm以上、深さ29cmの遺構で、調査区南壁際でごく一部を検出したのみであるため詳細は不明である。堆積土中より平瓦片が出上している。SD 11を切っており、SD 4、SK 5に切られている。



第29図 SX 9不明遺構 平面図

**小柱穴・ビット** 調査区内全域で検出したビット・小柱穴の数は39である。直径13cmから52cmの円形を呈するものが多く、中には柱痕跡を有するものもある。ビット5・6・37・39からは瓦片がわずかに出土している。

### 3. 出土遺物

今回の調査による出土遺物の総数は3162点である。出土遺物の中では古代の瓦片が圧倒的に多く、全出土遺物の89%を占めている。しかし、完形のものは1点もなく細片が大部分である。また、それ以外の遺物においてもほとんどが破片資料であり、わずかにSK 12土坑出土の赤焼土器壺2点のみがほぼ完形の資料である。第2表に遺構別の遺物集計表を示した。

#### ①瓦

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・文字瓦等が出土している。分類は『陸奥国分寺跡』(陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 1961) の分類基準に従った。

第2表 遺構別遺物集計表

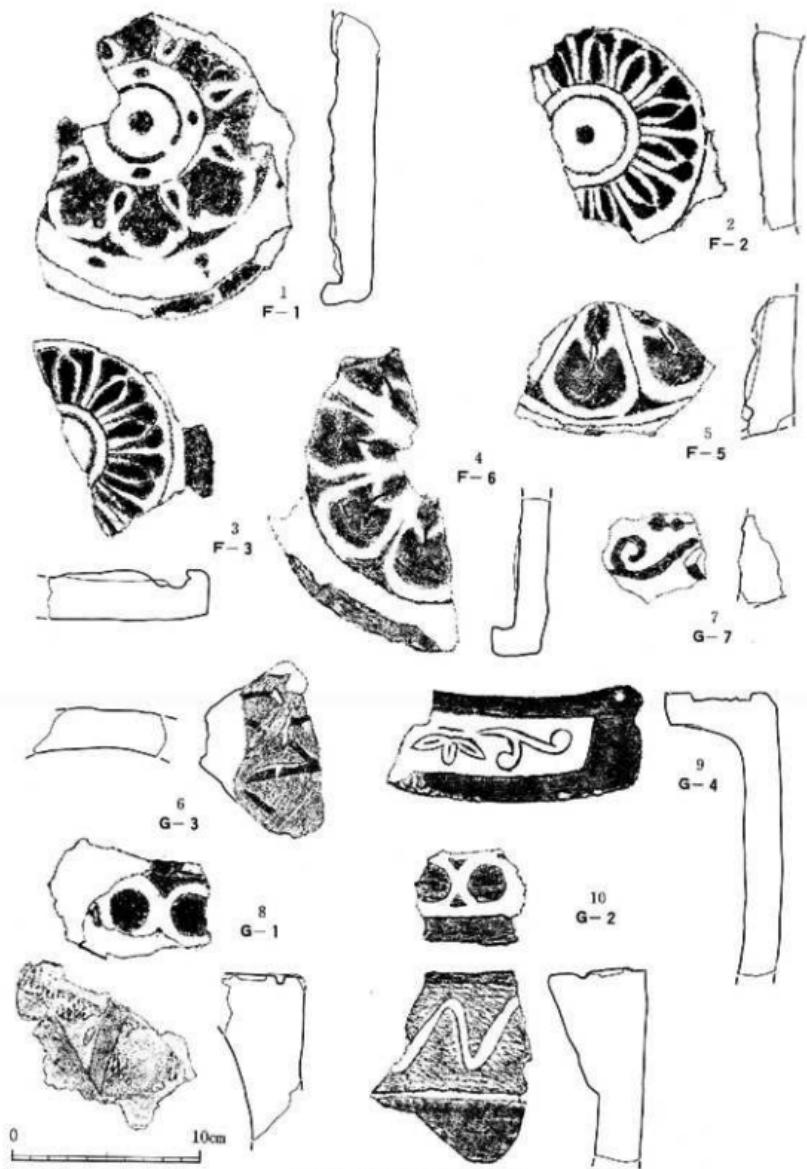
遺構名	遺物数	遺構名	遺物数	遺構名	遺物数
SD4	486	SK10	0	SK20	8
SD11	5	SK12	11	SX1	677
SD21	0	SK13	1	SX9	1
SK2	95	SK14	131	pit5	1
SK3	0	SK15	164	pit6	3
SK5	3	SK16	0	pit37	6
SK6	0	SK17	19	pit39	1
SK7	21	SK18	27	盛土内	1444
SK8	58	SK19	0	総計	3162

**軒丸瓦** 合計33点出土している。F-1～3（第30図1～3）はSX1不明遺構より出土しており、F-1は宝相花文第一類に、F-2・F-3は細弁蓮華文第一類に分類される。F-5（第30図5）はSK8土坑より出土しており重弁蓮華文第一類から第四類のいずれかに分類されると思われるが、破片であるため特定することは不可能である。F-6（第30図4）は盛土内より出土しており重弁蓮華文第五類に分類されると思われるが、瓦当面の1/2程しか残存しておらず詳細は不明である。

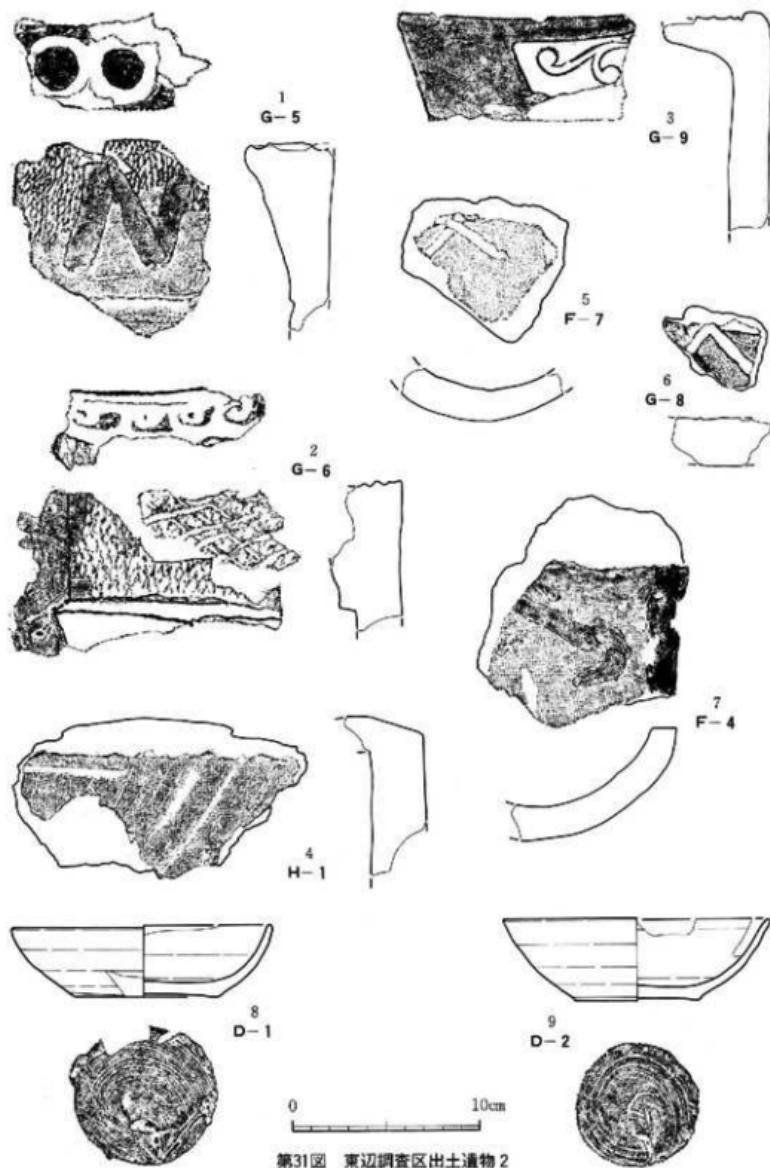
**軒平瓦** 合計13点出土している。G-1・2・4（第30図8～10）はSX1不明遺構より出土している。G-1は連珠文第一類に分類され、頸は無頭で縄叩きによる叩き締めの後、ナデ調整が施され、指先によるものと思われる波文が描かれている。縄叩き目は縦位のものである。G-2は連珠文第二類に分類され、頸は中頸で横位の縄叩き目が見られ、ヘラ状工具による波文が描かれている。G-4は近世以降の瓦である。G-5（第31図1）はSD4溝跡より出土しており、連珠文第一類に分類され頸は無頭で縄叩きによる叩き締めの後、ナデ調整が施され、指先によるものと思われる波文が描かれている。縄叩き目は縦位のものである。G-6・G-7・G-9（第30図7、第31図2・3）は盛土内から出土している。G-6は均正唐草文に分類されるが、瓦当面のほとんどが剥落しており詳細は不明である。頸は深頭で、縦位の縄叩き目がみられる。頸部は一部剥落しており平瓦の凸面には接合のための斜格子状のヘラキザミが入れられている。G-7は偏行唐草文第一類に分類されるが瓦当面の一部しか残存しておらず詳細は不明である。G-9は近世以後の瓦である。

**平瓦** G-3（第30図6）はSX1不明遺構より出土しており、凸面に「稻妻状叩き目」がみられるものである。「稻妻状叩き目」のみられる瓦は、陝奥国分寺跡発掘調査委員会による昭和30年から34年の調査、宮城県教育委員会による寄宿舎建設に伴う調査、及び昭和58年度の南大門跡東脇築地跡の環境整備・予備調査の際にも出土している。

**道具瓦** 今回の調査によって出土した道具瓦は1点のみである（H-1、第31図4）。SK



第30図 東辺調査区出土遺物 1



第31図 東辺調査区出土遺物 2

15土坑より出土しており、a面には糸切り痕と布目痕がみられ、側面とa面の裏側の面にはナデ調整が施されているが、用途は不明である。

**文字瓦** 合計6点出土している。しかし、いずれも破片資料であるため明瞭に判読できるものはない。F-4(第31図7)はSX1不明造構より出土しており、軒丸瓦の丸瓦部の凹面に指先によって書かれたと思われる沈線が施されている。F-7(第31図5)は盛土内より出土しており、丸瓦の凹面にヘラ状工具によって書かれている。線の切り合い等から「大」かと思われるが断定できない。G-8(第31図6)もまた盛土内より出土しており、平瓦の凹面にヘラ状工具によって書かれている。

## ②赤焼土器

土師器片と合わせて135点出土しているが、そのほとんどが細片である。D-1・D-2(第31図8・9)はともにSK12より出土している。(第20回)。D-1は底径7.5cm、口径13.8cm、器高3.7cmの内外面ともロクロ調整がなされた壊である。体部は内湾しながら外傾しており、上半部が若干歪んでいる。底部の切離しは回転糸切りによるもので、切離し後は無調整である。D-2は底径6.6cm、口径14.2cm、器高4.4cmの内外面ともロクロ調整がなされた壊である。体部は内湾しながら外傾し、口縁部で若干外反している。体部上半部は若干歪んでいる。底部の切離しは回転糸切りによるもので、切り離し後は無調整である。

## 注

(注1) この均正唐草文と同様の文様をもつ軒平瓦は、『東北古瓦図録』(原田良雄編 1974)の321(P.167), 327・328(P.171)などに類例がみられる。

(注2) 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡 政庁跡本文編』P.205

(注3) 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 1961『陸奥国分寺跡』図版102-5

(注4) 宮城県教育委員会 1980『東北新幹線関係遺跡調査報告書-IV-』P.122

(注5) 仙台市教育委員会 1984『史跡陸奥国分寺跡昭和58年度環境整備調査概報 南大門跡東臨塙地跡』P.20

(及川 格)



図版7 東辺調査区  
全景(西より)

図版8 東辺調査区  
東壁土層断面

図版9 東辺調査区  
南壁西側土層断面

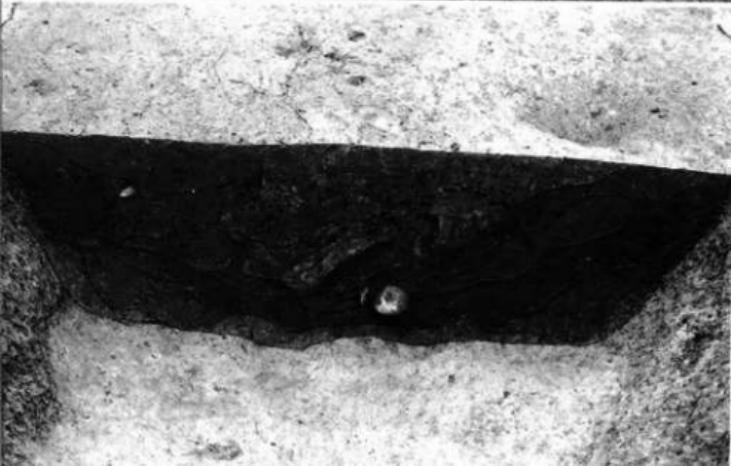




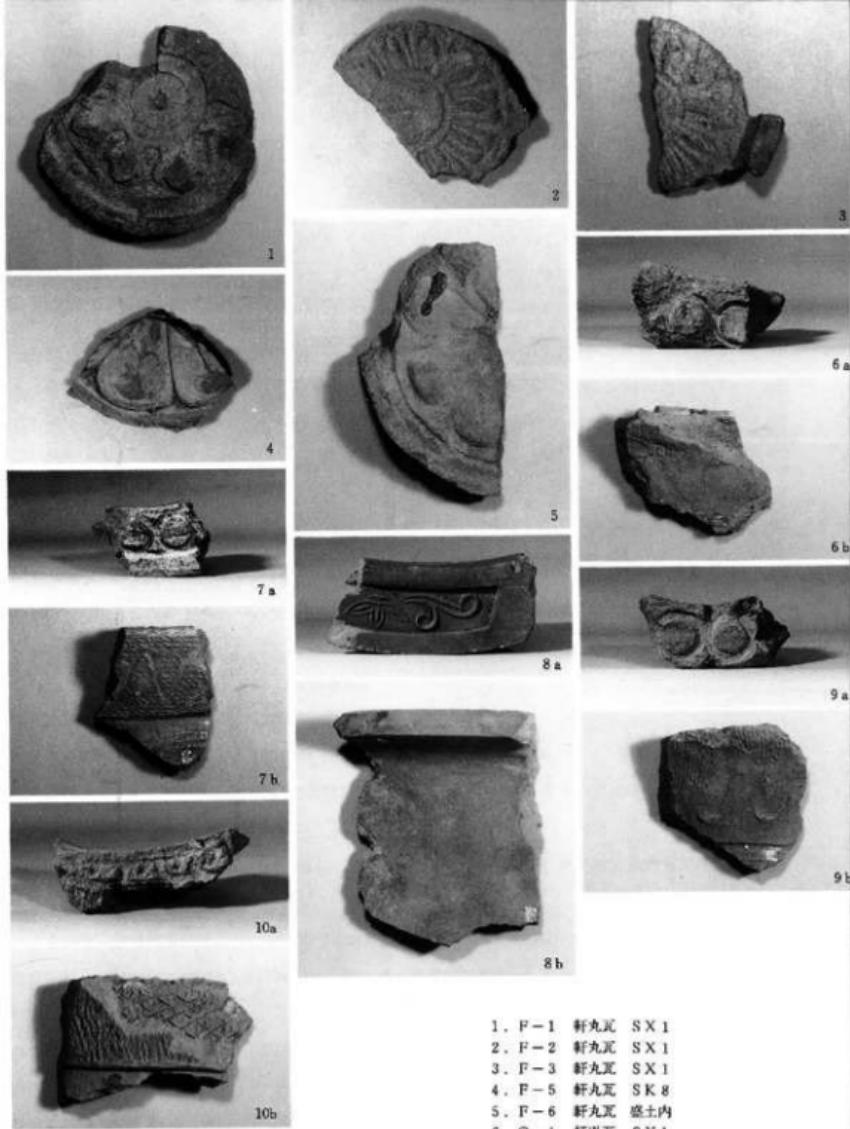
図版10 東辺調査区  
SX1 不明遺構(西より)



図版11 東辺調査区  
SK12土坑  
遺物出土状況

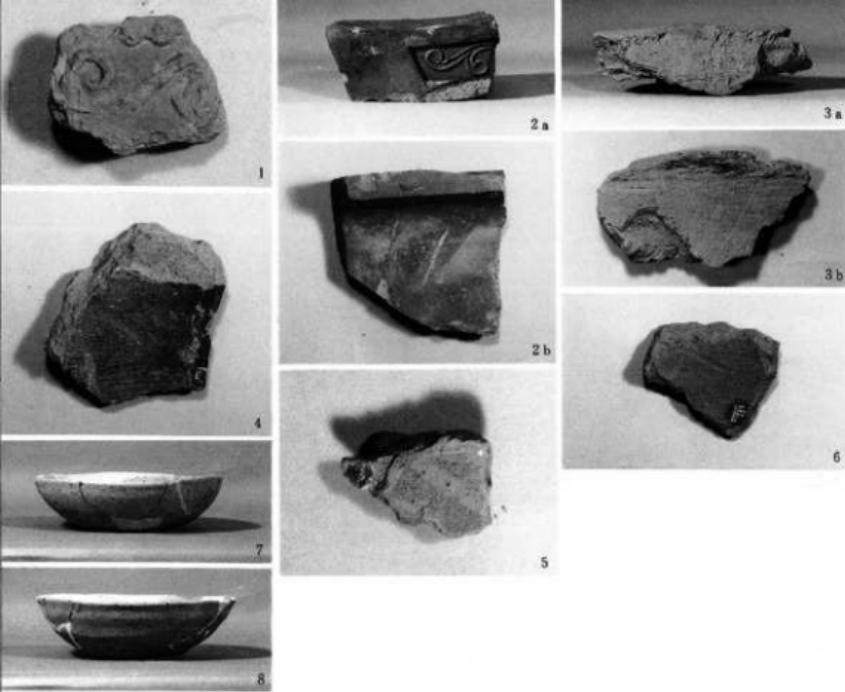


図版12 東辺調査区  
SD11溝跡  
断面(北より)



1. F-1 軒丸瓦 SX 1  
 2. F-2 軒丸瓦 SX 1  
 3. F-3 軒丸瓦 SX 1  
 4. F-5 軒丸瓦 SK 8  
 5. F-6 軒丸瓦 盛土内  
 6. G-1 軒平瓦 SX 1  
 7. G-2 軒平瓦 SX 1  
 8. G-4 軒平瓦 SX 1  
 9. G-5 軒平瓦 SD 4  
 10. G-6 軒平瓦 盛土内

図版13 東辺調査区出土遺物 1



1. G-7 虎平瓦 盛土内  
 2. G-9 虎平瓦 盛土内  
 3. H-1 道具瓦 SK15  
 4. F-4 文字瓦 SX1  
 5. G-8 文字瓦  
 6. F-7 文字瓦  
 7. D-1 赤燒土器环 SK12  
 8. D-2 赤燒土器环 SK12

図版14 東辺調査区出土遺物 2

#### 4.まとめ

- 西辺調査区で発見されたSD1溝跡は、これ以前で発見された溝跡（陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961、仙台市教育委員会 1983）と規模、形態とも類似するものであり、また位置、方向からも同一のものとみられる。これは西側を区画する溝と考えられる。
- 西辺調査区の東側断面において版築状の整地層が確認されたが、その層厚が北側に薄く、南側に厚く検出された。これは、前掲した以前の調査で、この版築状の整地層が南北約33mにわたることが知られていることと考え合わせると、「掘立柱」を列状に施設するために、地形の低い所に、事前に版築状の整地を行ったものと考えられる。
- 東辺調査区においては、築地の痕跡はつかめなかった。
- 東辺調査区で発見されたSD11溝跡は、東門跡調査で発見された3号溝、8号溝（仙台市教育委員会 1980）や鉄道学園の増築時に発見された溝（宮城県教育委員会 1980）などとほぼ同一位置と方向をもっているが、検出レベルや溝の形態が異なるなど、「御敷地とその外側を区画する溝」と判断するには、もう少し調査例を増すことが必要と考えられる。

(結城慎一)

#### 参考文献

- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 1961『陸奥国分寺跡』  
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1980『多賀城跡 政庁跡図録編』  
宮城県教育委員会 1980『(2)木の下遺跡』「東北新幹線関係遺跡調査報告書—IV—」宮城県文化財調査報告書 第72集  
仙台市教育委員会 1981『史跡陸奥国分寺跡 昭和55年度環境整備予備調査概報 東門跡』仙台市文化財調査報告書 第27集  
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982『多賀城跡 政庁跡本文編』  
仙台市教育委員会 1983『仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告—』仙台市文化財調査報告書 第47集  
仙台市教育委員会 1984『史跡陸奥国分寺跡 昭和58年度環境整備予備調査概報 南大門跡東臨築地跡』仙台市文化財調査報告書 第63集  
仙台市教育委員会 1985『仙台平野の遺跡群Ⅳ—昭和59年度発掘調査報告—』仙台市文化財調査報告書 第75集  
仙台市教育委員会 1986『仙台平野の遺跡群V—昭和60年度発掘調査報告—』仙台市文化財調査報告書 第87集  
仙台市教育委員会 1987『仙台平野の遺跡群VI—昭和61年度発掘調査報告—』仙台市文化財調査報告書 第97集

## 〔2〕北目城跡

### 1. 遺跡の位置と環境

北目城跡（仙台市文化財登録番号C-505）は、仙台市郡山四丁目・郡山館ノ内・郡山北目宅地に所在する。この地点は、JR仙台駅の南南東約4kmにあたり、国道4号線仙台バイパス千代大橋南側の鹿ノ又交差点付近にあたる。本遺跡は、三方を広瀬川と名取川に挟まれた「郡山低地」東半部北東端に位置し、広瀬川右岸の標高11m程の自然堤防上に立地する（注1）。

周辺の遺跡には、多賀城以前の官衙跡として知られる郡山遺跡が西側に隣接しており、さらに西へ800m程のところに西台畠遺跡（縄文～古墳）がある。南方には約700m程離れたノ上遺跡（古墳～平安）があり、南東方向には籠ノ瀬遺跡（古墳～平安）・的場遺跡（奈良～平安）がある。また、中世の古碑群として北目古碑群・穴田古碑群が南方約400mのところにある。



第32図 北目城跡と調査位置図

## 2. 調査経過

北口城は北口館あるいは喜多目城とも呼ばれ、戦国末期に国分氏の家臣であった栗野大膳が築城し、この地が伊達氏の領国支配となった後も營まれ��けたと伝えられている。「古城書上」によれば東西46間、南北56間を有し、四方に幅8間の濠をめぐらしていたという（注2）。現在は、国道4号線仙台バイパスが南北に通り、さらに遺跡の中央部がバイパスと長町広瀬橋を結ぶ道路との交差点にあたっており、交通の要地ということで近年開発行為が特に進んでいるところでもある。

今回の調査は、仙台市都山四丁目15-24 岩原勝雄氏より、昭和62年4月28日付けで郡山四丁目138地内における共同住宅建築のための発掘届が提出され、同地が北口城跡の中央部や西寄りの地点にあたるため、遺構の存在や範囲を確認する目的で昭和62年11月9日より発掘調査を実施した。なお、この調査は西側に隣接する郡山遺跡の方四町Ⅱ期官衙東辺部から約150mしか離れておらず、城跡に関わる中世の遺構のみならず古代官衙関連遺構の広がりも予想されるため、実際は郡山遺跡第73次発掘調査として行っている。

調査は、敷地の中央部に3×20mの東西方向に長い調査区を設定し、かなりの深さまで細耕作による天地返しが及ぶことを想っていたため、重機を使用して盛土及び耕作土を排除し遺構の検出作業を行った。その結果、地表下80cmの褐色シルト層（Ⅲ層）上面で南北方向にのびる溝跡を1条、地表下90cmの黄褐色粘土層（Ⅳ層）上面で小溝遺構群を検出した。調査は11月24日全てを終了し25日に埋め戻しを行った。

## 3. 基本層序

本調査では、調査区西端部において上層位確認のためⅢ層以下の一部深掘りを実施している。ここでは、その深掘り部分も含め記述しておきたい。

1・Ⅱ層は盛土及び耕作土層であり、厚さ約80cmを計る。この耕作土中から陶器片・鉢片、土師器片・甕片が出土している。Ⅲ層は褐色シルト層で厚さ約10cmを計る。Ⅲ層の上面で溝跡を1条検出した。Ⅳ層は黄褐色粘土層で厚さ約30cmを計る。Ⅳ層の上面で小溝遺構群を検出している。Ⅴ層は明黄褐色粘土層で厚さ約40cmを計る。3層に細分されるが、特にⅤ-a層において植物遺体の堆積が目立つ。Ⅵ層・Ⅶ層は共に灰白色粘土層で厚さはⅥ層が約25cm、Ⅶ層で約40cmを計る。Ⅷ層は褐灰色粘土層で厚さ約30cmを計る。

## 4. 発見遺構・出土遺物

発見遺構は、Ⅲ層上面における溝跡1条、Ⅳ層上面における小溝遺構群である。

S D 1077A・B溝跡 Ⅲ層上面で検出された南北方向にのび、2時期に分けられる溝である。調査区設定の制約により、長さは3m程しか確認できなかったが、さらに南北に続くものとみられる。上幅はAが164cm以上で、Bは286cm、下幅はAが79cm、Bが76cm、深さはAが72cm、

Bは61cmを計る。断面形はAが逆台形、Bは扁平U字形である。方向はABともN-8°-Eである。堆積土はAが灰黄褐色粘土質シルト、褐灰色・灰黄褐色粘土で、Bは褐色・にぶい黄褐色の粘土質シルトである。遺物は△の底面から土師器壺片1点が出上している。

**小溝遺構群** 調査区東半部のIV層上面において小溝跡が4条検出された。上幅は43~70cm、下幅が22~28cm、深さは14~32cmを計る。断面形はいずれも逆台形で、堆積土も褐灰色シルトと共通している。方向はN-7°~13°-Eとほぼ平行しており、溝同士の間隔は2.2~3.3mを計る。遺物は出土しなかった。

## 5.まとめ

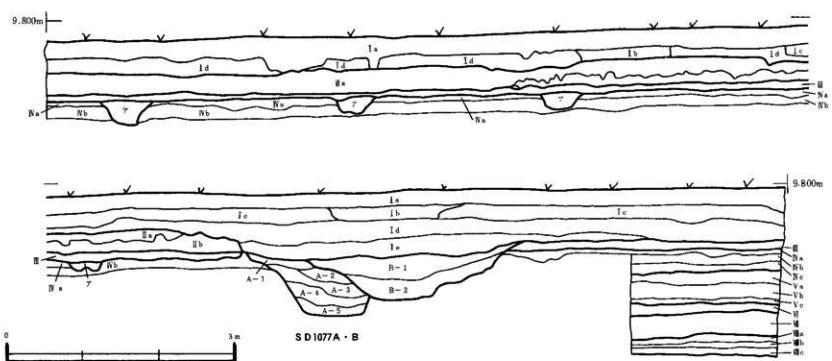
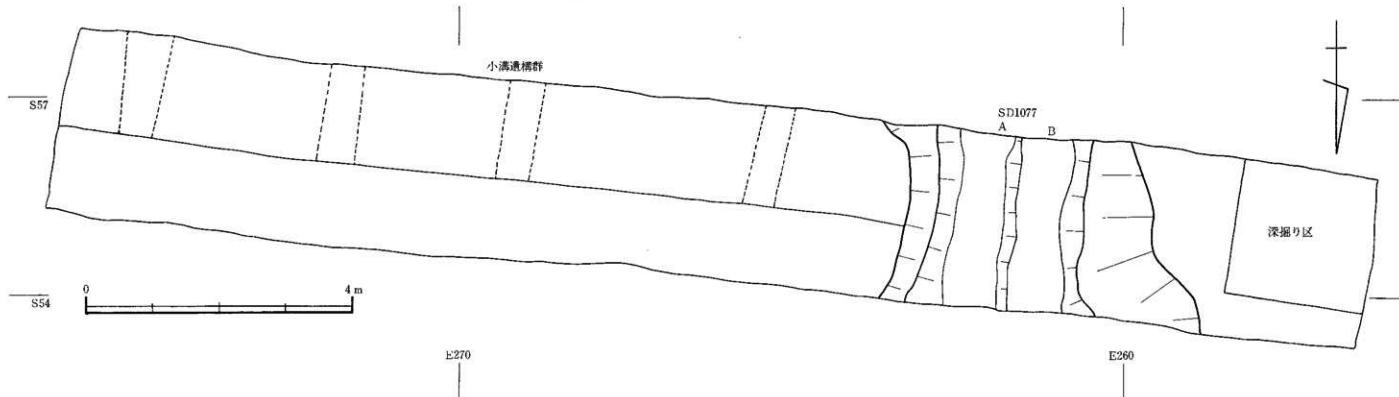
今回の調査では、ほぼ真北方向を基準とする溝跡と小溝遺構群が検出されたが、調査区域が狭く、また遺物の出土も極めて少なかったことから遺構の年代等を究明するには致らなかった。しかし、これらの遺構検出地点は、北目城西辺を区画する外濠り推定位置より東に約40m程のところであり、城内において何かしら区割りを目的としたものとの見方もできる。北目城跡は、その規模や構造等について不鮮明な部分が多い。今後とも周辺地域の調査を継続し、実態を解明していくことが課題となろう。

## 注

(注1) 地学団体研究会『新版 仙台の地学』1980

(注2) 紫桃正隆『史料 仙台領内山城・館』第四巻 1974

(千葉 仁)



土色		土性	種	考
品	本位			
I-a	10YR5/4	よい 黄褐色	シルト	
I-b	10YR5/4	暗 黄褐色	シルト	
I-c	10YR5/4	灰 黄褐色	シルト	炭化物を多量に含む。
I-d	10YR5/4	暗 灰	シルト	炭化物を少量含む。
I-e	10YR5/4	暗 灰	シルト	炭化物を多量含む。
II-a	10YR5/4	によい 黄褐色	シルト	酸化鉄、マンガン鉱を少量含む。
II-b	10YR5/4	暗 灰	粘土	マンゴン鉱を少量含む。
III-a	10YR5/4	暗 黄褐色	粘土	酸化鉄、マンゴン鉱を少量含む。
III-b	10YR5/4	暗 黄褐色	粘土	酸化鉄、マンゴン鉱を少量含む。
IV-a	10YR5/4	暗 黄褐色	粘土	酸化鉄、マンゴン鉱を少量含む。
IV-b	10YR5/4	暗 黄褐色	粘土	酸化鉄、マンゴン鉱を少量含む。
V-a	10YR5/4	明 黄褐色	粘土	マンゴン鉱を少量含む。
V-b	10YR5/4	明 黄褐色	粘土	マンゴン鉱を微量含む。
VI-c	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-d	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-e	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-f	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-g	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-h	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-i	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
VI-j	10YR5/4	灰 白色	粘土	無機物を通じて灰白色に模様する。
S-D107A-B	灰	粘土	シルト	酸化鉄を少量含む。
A-1	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
2	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
3	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
4	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
5	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
B-1	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
2	10YR5/4	灰 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
小品	10YR5/4	暗 底	粘土	酸化鉄、マンゴン鉱を少量含む。

第33図 調査区 平・断面図

図版15  
調査区全景  
(西より)



図版16  
SD1077A・B全景  
(北より)



### 〔3〕郡山遺跡

郡山遺跡はJR長町駅東側で、広瀬川と名取川に囲まれた郡山低地東部に位置している。陸奥國府多賀城が造営される前の官衙及び寺院跡が発見されており、年代は7世紀後半～8世紀初頭が考えられている。今年度はこの遺跡内で36件の発掘届が提出され、うち重要遺構にかかる地区的4件に対して事前調査を実施した。その概略について報告を行ない、詳細は「郡山遺跡報告」で報告したい。

#### 1. 第68次調査

方四町Ⅱ期官衙の中央北地区にあたり、昭和61年度第61次調査区と昭和58年度第35次調査区の間に位置する。Ⅰ期官衙の主要部分に関する遺構の存在が予想された。ここに住宅の建築が計画されたため、緊急調査を実施した。その結果、Ⅰ期官衙段階以前の溝跡、Ⅰ期官衙段階の掘立柱建物跡・竪穴住居跡、Ⅱ期官衙段階の一本柱列などが発見された。

#### 2. 第69次調査

方四町Ⅱ期官衙の外郭東辺にあたり、外郭南東コーナーより北に160m程の地点に位置する。外郭東辺の材木列等の存在が予想されていた。ここに住宅の建築が計画されたため、緊急調査を実施した。その結果、外郭東辺推定位置で材木列を発見したが、木材は遺存していなかった。

#### 3. 第71次調査

方四町Ⅱ期官衙の中央地区にあたり、昭和55年度第2次調査区の東側に隣接して位置する。Ⅰ期・Ⅱ期官衙に関する遺構の存在が考えられ、特に第2次調査で発見された遺構の延長が予想されたところである。ここに住宅の建築が計画されたため、緊急調査を実施した。その結果、Ⅰ期官衙段階の官衙建物跡や倉庫建物跡などが発見された。

#### 4. 第72次調査区

方四町Ⅱ期官衙東地区にあたり、Ⅰ期・Ⅱ期官衙に関する遺構の存在が予想された。ここに住宅の建築が計画されたため、緊急調査を実施した。その結果、Ⅰ期官衙段階の掘立柱建物跡・竪穴住居跡の一部と、Ⅱ期官衙段階の一本柱列などが発見された。

(千葉 仁)



第34図 郡山遺跡と調査位置

## 文化財課職員録

課長 早坂春一

調査係

	係長	佐藤 隆	主事	斎野裕彦
	主事	結城清一	〃	佐藤良文
管理係	教諭	太田昭夫	〃	長島栄一
係長 成田時雄	主事	篠原信彦	教諭	千葉 仁
主任 岩澤克輔	〃	木村浩二	〃	松本清一
主事 白幡靖子	〃	佐藤 洋	主事	及川 格
〃 山口 宏	〃	金森安孝	〃	中富 洋
	〃	佐藤甲二	〃	平間亮輔
	教諭	小川淳一	教諭	渡辺雄二
	主事	吉岡恭平	主事	宮崎 明
	〃	渡部弘美	〃	佐藤 淳
	〃	工藤哲司	〃	松本素明
	教諭	橋本光一	〃	渡部 紀
	主事	主浜光朗	〃	大江美智代
		〃 (併任) 工藤信一郎		

### 「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—(昭和57年3月)
- 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書—(昭和58年3月)
- 第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書—(昭和59年3月)
- 第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ—昭和59年度発掘調査報告書—(昭和60年3月)
- 第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ—昭和60年度発掘調査報告書—(昭和61年3月)
- 第97集 仙台平野の遺跡群Ⅵ—昭和61年度発掘調査報告書—(昭和62年3月)
- 第III集 仙台平野の遺跡群Ⅶ—昭和62年度発掘調査報告書—(昭和63年3月)

---

---

仙台市文化財調査報告書第111集

仙台平野の遺跡群Ⅳ

昭和63年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市若柳町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 業 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL263-1166

---

---

